

東京大学農学部創立一二五周年記念 農学部図書館展示企画
場所 弥生講堂ギャラリー
平成十二年三月二十七日～三月三十一日

東京大学農学部図書館所蔵資料から見る
「農学教育の流れ」

いあいせい

東京大学農学部図書館では、農学部一二五周年記念を協賛して、「農学部図書館所蔵資料から見る農学教育の流れ」と題した資料の展示会を企画いたしました。

本館は当農学部および全国農学系拠点図書館として、膨大な資料の保存に携わって参りました。これらはいずれも農学教育・研究の原点を知るばかりでなく、温故知新の言葉通り、二十一世紀の教育・研究を展望するうえで極めて貴重なものであります。

そこで一二五周年を機に、重要な資料の一部を多くの人に閲覧いただきたく、展示会を開催するに到りました。歴史の流れのなかに身を委ね、ひとときのタイムトラベルをお楽しみ下さい。

この企画には本学農学生命科学研究科の多くの教官のご指導をいただきました。この企画を担当した図書館の職員の方々と共に心から御礼申し上げます。

平成十二年三月二十七日

東京大学農学部図書館長

上野川 修一

展示会概要

農業・資源経済学専攻 農業史研究室
岩本純明

今回の展示にあたっては、農学部図書館のコレクションの中から、(1)近世期に刊行された農書や動植物図譜、(2)著名な海外の動植物学者あるいは日本とゆかりのある人物の著書、(3)駒場農学校教官の著書・講義ノート、(4)農林省（農商務省）が調査・集成した『農務顛末』と『小作慣行調査』、(5)本学卒業生の卒業論文、などが選出されている。

維新後の明治初期農政が、欧米農業の模倣・導入に始まったことはよく知られている。新しい作物や新品種、優良家畜、大農具などの輸入がそれであるが、結果的には、わが国農業に深い影響を及ぼすことがなかった。しかし「学理」の導入という面では、事情は異なった。すなわち、外国人教師を通じた西欧農学の導入である。明治政府は学術の各分野で多くの外国人教師を採用した。農学分野では、農芸化学の領域で多くの弟子を育てたO・ケルネル（滞日期间、一八八二～九二年）やM・フェスカ（同、一八八二～九四年）が著名である。単なる知識の伝承ではなく、実験・分析を通して科学的な知見を獲得していく手法そのものが外国人教師から直接教授された意義は大きかった。今回のコレクションには、こうしたお雇い外国人関係資料のほか、彼らの教授を受けた日本人教師の講義ノートなどが展示される。

明治初期農政のもう一つの基調は、本邦における在来農法への着目であった。駒場農学校試業科教師に群馬県の老農船津伝次平を迎え、泰西農場のほかに本邦農場を開設して彼等の農法を比較対照させたのはその一例である。在来農法への着目は、明治十年代中頃に集中的に実施された近世農書の蒐集事業につながっていく。農学部が所蔵している近世農書や図譜の多くには、農商務省図書であったことを示す蔵書票が添付されている。おそらく、この時期に蒐集された農書・図譜の一部が、その後本学に寄贈されたものであろう。

欧米農法の模倣と在来農法への着目との間で揺れ動く明治初期農政については、この過程で作成された史料を巨細もろさず収録した『農務顛末』がまずひととかれるべきである。農学部図書館の貴重なコレクションの一つである『小作慣行調査』とともに展示される。

以上のほか展示に供されるのは、本学卒業生の卒業論文数点と海外の著名な動植物学者や日本とゆかりの深い人物の著書である。私の専門分野で言えば、小平権一氏の卒業論文は、その後農政官僚の道を歩み通した氏の将来を予言しているようで、まことに興味深い。

今回展示されるのは、農学部貴重なコレクションのほんの一部である。この展示が、新しい発見への誘いとなれば幸いである。

綿圃要務二巻 大蔵永常著 天保四年 刊本

『綿圃(甫)要務(めんぼえつむ)』は、題名の通り綿(*Gossypium*;ワタ)栽培の手引き書である。綿は加工の過程が多いことから仕事を生み出し国民をにぎわすと、綿栽培を推奨する。上巻では、顕微鏡まで用いて形態を図解した上で、気候適性、品種分類、種子の扱い・播種法、油槽や干鰯など肥料の種類と与え方、綿摘みと一通りをイラスト付きで解説しており、今日の栽培の教科書に劣らぬ構成である。下巻では、主要産地の畿内・山陽の綿栽培から篤農技術を掘り起こし、加えて品質の判別基準を紹介している。

著者の大蔵永常(一七六八―一八六〇)は、豊後国日田郡隈町(現在の大分県日田市)の出身である。その生涯は早川孝太郎による『大蔵永常』(山岡書店一九四三)に詳しいが、町家に奉公していた大蔵は、天明の大飢饉に苦しむ農家を目のあたりに見聞き、暮らしの安定には換金作物の普及が重要と感じて農学を志したという。大蔵の著作は『農家益』(一八〇二)から『広益国産考』(一八五九)まで三十にも及ぶが、『農具便利論』に典型的にみられるように、すぐれて実践的で、農業の心得とあわせて懇切に教え諭すように書かれている。

このように多くのすぐれた農書をものした大蔵であるが、その農業の実験のはじめは、実家で祖父が行って

いた綿の栽培であったようだ。この祖父は、町家でありながら農業にくわしく、なかんづく綿を作ることに妙を得ていたといい、作物に対してはわが子を育てる心で臨んだと本書冒頭の「惣論」にある。大蔵が力を入れた工芸作物のなかでも、綿はとりわけ思い入れの深いものであつたらう。また、本書は天保四年(一八三三)の刊であるから、奇しくも天明大飢饉とならぶ天保の大飢饉の初期にあたる。

綿は、ガンジーのインド独立運動や、アメリカ黒人奴隷貿易の歴史にみられるように、政治・経済を大きく動かしているほどの重要な産品であつた。今日わが国の綿生産は稀で、綿花も知らない人が多いが、生活における綿の重要性は今も昔も他国に劣るものではない。機械紡績の発達で輸入原料が主体となるまでは、河内木綿など国内でも盛んに生産されていた。

十六世紀に国内各地で栽培されるようになった綿は、江戸時代にはさらに生産が進み、政策的に贅沢品とされた絹や、染めやすさに難のある麻に代わって、木綿(もめん)が織物の主役となっていく。江戸時代は、流通と貨幣経済が発達し、米中心の農業・経済から、菜種(ナタネ)・綿など、加工・流通を前提とした工芸作物・換金作物をとりいれての体質転換が各地の統治者側からも、生産・消費の現場からも求められた時代でもあつた。とは

いえ、農家にとって新しい作物の導入は、今も昔も暮らしを質にしての冒険である。とくに長年馴染んだ稲作から工芸作物への転換は、大蔵も指摘したように、技術を習得して生産の実を上げるのに年数を要する。工芸・換金作物をとりあげた実践的な解説書としての大蔵の農書が果たした役割の大きさは想像に難くない。

本書の内容をご覧になりたい方には、『日本農書全集第十五巻』（農山漁村文化協会 一九七七）に『除蝗録』『農具便利論』とともに収録され、岡光夫氏による現代語訳とすぐれた解題が付されている。また、『大分歴史事典』（<http://www.obstiv.co.jp/heo/heohome.htm>）というWebサイトのなかに、大蔵永常について分かりやすくまとめた紹介 <http://www.obstiv.co.jp/heo/heodata/r199.htm>）がある。なお、綿の和名は片仮名の「ワタ」であり、植物体をさす漢字には「棉」があるが、この解題では綿で統一した。

（生産・環境生物学専攻 阿部 淳）



図1 『綿圃要務』生葉の図、花の図、モモ（綿花）の図

千蟲譜 栗本昌臧著 写本

江戸時代には博物学が大いに盛んになり動植物の図譜も多数つくられているが、昆虫の図譜は比較的少ない。

『千蟲譜』はその中で一、二を争う有名な書である。観察により生きた特徴を捉えた彩色図に名前の由来、方言、生態、利用法など丁寧な解説が付けられており、現代で言えば生態図鑑的な図譜である。この時代の昆虫図譜としてはかなり普及したようで多くの写本が現存する。一方、原本（一八一一年完成）は残念ながらすでに失われているようである。東大に所蔵されるものは和装本七冊からなる写本で、いずれの巻にも「農商務省図書」を消印して「農科大学図書」の印がある。明治十年代に農商務省所管の農学校が購入し、農科大学への改組にともなうて蔵書印を押しなおしたのではないかと推察される。いずれにしても本学が非常に早い時期に本書を入手し、以後貴重本として大切に保管してきたことがうかがわれ、現在の状態も若干の虫食いがあるものの良好である。ただし、写本であるせいかと思われるが、図にも説明文にもスタイルや巧拙にかなりの差が存在する。

著者は栗本丹洲（1759-1834、本名は昌臧、まさとよし）。

田村派本草学者の総帥で江戸における代表的な博物学者として著名な田村藍水の次男。長じて幕府の医官であった栗本家の養子となり、自身も御殿医として活躍し晩年

には医官の最高位に叙せられている。職務である本草学の講義、薬物の鑑定を長く続ける一方、魚、鳥、虫などの図譜を著した。『千蟲譜』は彼の著作では唯一知られている虫類の図譜である。動植物のなかで虫類についての書物が乏しいので自らつくることを決意し、十八年をかけてこれを完成させたという。なお、丹洲のもとからはやがて「楮鞭会（しゃべんかい）」という博物学同好者のグループがつけられた。農学部は現存するものでは日本最古とされる貴重な昆虫標本を所蔵しているが、その製作者である武蔵石寿も楮鞭会の重要メンバーであった。

本書で扱われている虫類は昆虫が主体であるが、昆虫以外の節足動物（クモ、ダニ、カニ、ムカデ、など）をはじめとする無脊椎動物（クラゲ、ミミズ、ゴカイ、カイ、タコ、ナメクジ、ヒトデ、ナマコ、など）、小型の脊椎動物（タツノオトシゴ、カエル、サンショウウオ、ヘビ、トカゲ、コウモリ、など）、さらには昆虫寄生菌類（冬虫夏草）まで含まれている。この事情は武蔵石寿の標本でも同様であり、当時「虫類」は広くこれらを指していた。これらの多くは著者が自ら採集や飼育したものであるが、知人から贈られた地方産、はては舶来の珍品も紹介されている。主体である昆虫は多様性のきわめて豊富な動物群であるが、本書でもそれがいかに示されている。人との関連が深い益虫（ミツバチ、カイコ、な

ど)や害虫(ハエ、カ、ノミ、ダニ、ゴキブリ、ウンカ、など)が多くとりあげられているのは当然である。中で薬用種(マメハシヨウ、孫太郎虫)や有毒種(カメムシ、など)の記述が目立つのは本職との関連だろう。しかし、むしろ大半は人間生活とは関連が薄い昆虫である。チョウ、ガ、セミ、トンボ、キリギリスなど大型で美麗なものから、チャタテムシ、ハネカクシなど小型で地味なもの、はては動物の糞や死骸につくセンチコガネやシテムシにまで分け隔てなく、するどく、かつ優しい観察眼が、ときに顕微鏡を通して、注がれている。中でも生態をよく捉えていると思われるのは、チョウ、ガなどの幼虫や蛹の観察図、および、子の餌となる芋虫やクモを狩る蜂類の行動を描いた図である。これらからは著者が本職を超えて万物を愛する博物学者であり、何より偉大な昆虫マニアであったことがうかがえる。

(生産・環境生物学専攻 田付貞洋)

【参考資料】荒俣宏『博物学の世紀』NHK市民大学、1989.7.9. 155頁、日本放送出版協会(1989)、田中誠『栗本丹洲』彩色江戸博物学集成、下中弘(編)189-208頁、平凡社(1994)】



図2 『千蟲譜』蠶(カヒコ)の図

国牛十図 藤原貞幹序 安永七(1788)年写本

この国牛十図は鎌倉末期に成った国産の牛の図説である。筆名・河東牧童寧直磨によって書かれ、後年、江戸時代中期の考古学者・藤原貞幹の蔵書(左京藤原貞幹蔵書の印)となった。この書は国学者・塙保己一が編集した群書類従の二八輯(巻)に所収されていることから、その底本になっていると考えられる。藤原貞幹の蔵書ではあるが、遊戯三味院の印も見られることから、他者の蔵書であったか、または藤原貞幹から他者に手渡った書である。

藤原貞幹の序文に牛図は十図あるべし、しかし今所存しているものは九つで、一つを逸してしまった可能性もあるが、他日全本を得ようとする意志が伺える。

牛の説明の前に、鎌倉末期の筆者の序文があり、大意は以下の通りである。馬は関東、牛は西国というのは陰陽の精霊の働き方による。馬の賢さにくらべ牛は若干劣るところがあるが、貴族から庶民まで役に立つもので、五畿七道(全国)から京洛(都)へ集められる。その牛の肉付や骨格からわかる産出の国はわずかに十力国であるので、見分けるためにその形跡を記して十図と名付ける。誤りがあった、後世批判されるのは覚悟のうえである。

一、筑紫牛は姿良く、本来は寺岐島の産である。元寇の際に元軍のいけにえ(食用)とされたために、一時少なくなつたが近年また多くなつてきた。



図3 『国牛十図』御厨牛

二、御厨牛は肥前国御厨の産で遅しい牛である。もとも

と貢牛であつた所からの呼称で、中古の名牛の産地であつた。西園寺公経から朝絵の印を許可されたという。

三、淡路牛は小柄ではあるが力が強く、逸物も少ない。近年、西園寺公経から御厨牛と同等の評価を得た。

四、但馬牛は腰や背ともども丸々として頑健であり、駿牛が多い。

五、丹波牛は但馬牛とよく似ており、近年逸物が多い。

六、大和牛は大柄であるという特徴がある。ところが、角蹄が弱いという欠点があつたが近年は良くなった。

七、河内牛はまあまあという所で、駿牛も存在する。

八、遠江牛は蓮華王院領の相良牧の産である。その見かけは筑紫牛に見まがう駿牛であるが、ややあばれものである。故今出川入道太政大臣家がこの地に筑紫牛の血統を移入させたものという。

九、越前牛も大柄で逸物が多い。

一〇、越後牛は力が強く、まれに逸物がある。この牛の図はない。

このほか出雲、石見、伊賀、伊勢などにもよい牛がいることを伝え聞いてはいるが、その姿形を見定めるまでには至っていない。

(獣医学専攻 今川和彦)

日東魚譜 神田玄泉纂写本

医者であつた神田玄泉の著で、我が国で最初の魚介のみの魚譜といわれる。序文に享保丙辰歳二月上旬とあるから、一七三六年に序を記したことになる。ただし、いくつかの版があつて内容も若干異なつており、最古は一七一九年、一般には一七三二年版が認められている(上野益三著『日本動物学史』平凡社1987)。全文漢文で記された和紙(ただし、絵図にある種名はカタカナ表記)をとじ合わせたもので、食用・薬用としての魚介類が記述されている。上野は五十四枚の絵図を入れて分かりやすくしてあると書いているが、本書には二八五枚もの絵図がある。もともとは五巻ものとされているのに、本書は九冊に分冊されており、絵図数の増加を併せ考えると、後生にかなり増補して刊行されたものと推測される。さらに、上野の記述では分類体系がかなり人為的とされているが(たとえば、海産無鱗魚に、タコ、イカ、クラゲ、ナマコ、ホヤが入れられている等)、本書ではこの点著しい改善が見られるため、分類学の知識が普及し始めた明治時代初期に作り直された可能性がある。しかし、写本を含めて本書を所蔵しているところは十数カ所しかない稀覯本である。漢文と魚の絵図とを対照して、内容を理解するのも一興であろう。なお、登録番号順に見ると、内容に矛盾があり、配列を変える必要があると考えられる。



図4 『日東魚譜』索鯛(サクダイ) 條鯛(スヂダイ)他

(水圏生物学専攻谷内 透)

水中動物図 写本

駒場農学校時代からの蔵書である。表紙中央部に農商務省図書第四〇六號共冊という紙が貼られ、その上部に駒場農学校の蔵書番号が付されている。著者、出版社、出版年月日についての情報はどこにも記されていないが、駒場農学校時代の蔵書であるから、少なくとも駒場農学校が東京農林学校と改称した明治十九(1886)年七月以前のものである。中身は、一九〇種余りの主要水産物の生息場所、成長、産卵や産仔などの生態的な情報に加えて漁獲法や味覚を簡単に紹介している。魚類がもつとも多く、一三一種に及ぶ。各種にカラーの絵があり、頁をまたがって描かれている生物も多く、和紙ををとし合わせた当時の製本状況が伺い知れる。必ずしも絵が正確に描かれているとは言いがたい反面、絵には生々しい躍動感があふれ、見ていて楽しい蔵書である。学術的な価値は高くはないが、現今とは異なる名称のものも多く、当時の世相を表す出版物にみられる魚介類の正確な名称が推測可能である。

(水圏生物学専攻谷内 透)

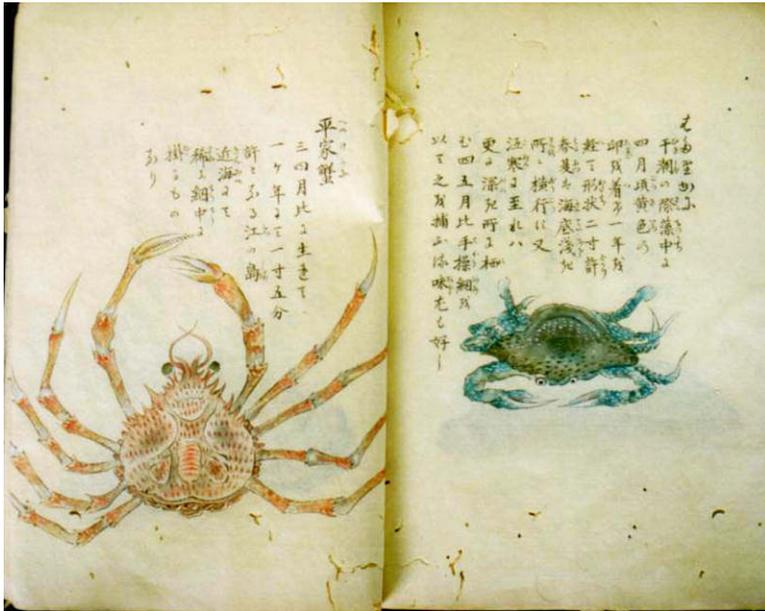


図5 『水中動物図』渡蟹、平家蟹

農業振興策 横井時敬著 1907
 信用組合論 附生産及経済組合二関スル意見 高橋昌、横井時敬合著 1891

横井時敬は万延元(1860)年一月肥後熊本藩士横井久右衛門の四男として生まれ、熊本洋学校を卒業後、明治十一年(1878)年に東京駒場農学校農学本科に入学、同十三年六月に同科を卒業した。卒業後は兵庫県、福岡県、農商務省などに勤務するが、福岡県農学校時代に「種初めの塩水選種法」を考案し、それをもとに刊行した『稻作改良法』(1888)は有名である。明治二十三(1890)年に農学士の組織である農学会の幹事長となり、明治二十四(1891)年一月には、農商務大臣井上馨への答申であり、農学会の農政提言第一号とされた『興農論策』を自ら執筆した。明治二十六(1893)年に東京帝国大学農科大学講師、翌二十七年には教授となり、農学第一講座を担当したが、横井は大正十一(1922)年に東京帝国大学を退官し、昭和二(1927)年に六十七歳で亡くなるまでの間、大日本農會副会頭、東京農業大学初代学長、帝国農會特別議員、小作調査会委員などを歴任し、その間に『栽培汎論』(1898)『農業経済学』(1901)『農学大全』(1904)『農業振興策』(1907)『農村改良論』(1917)『合閏率』(1917)『小農に関する研究』(1927)など多数の著書を執筆した。彼が最もめざしたのは、学理と実地の面での農学研究であり、その

方法論からいえば分解的研究と総合的研究の調和であった。彼の「農学栄えて農業」¹⁾、「稲のことは稲に聞け」という有名な言葉は、この両者の整合性を見出すために苦闘した一農学徒の苦汁の言葉として受けとめることができる。

横井の著作のうち『信用組合論 附生産及経済組合二関スル意見』²⁾は、当時農学会の評議員であつた高橋昌との共著で、明治二十四(1891)年十二月に発行されたものである。その目的は、第二帝国議会に内務大臣品川弥二郎が提出した『信用組合法案』に対する、農学会としての見解を広く世に問うことであつた。この「法案」は松方デフレ等による農民の疲弊が深刻になつた明治中期に、これを防ぐために当時の法制局長平田東助と杉山孝平が中心となり、ドイツの都市部で設立されていたシエルチ工系の信用組合をモデルに起草したものであつた。しかし、当時の農学会と農商務省は、農業・農村振興には信用組合だけではなく、購買、販売、生産などの諸事業をも行う総合的な協同組合が必要であると考へており、当時ドイツの農村で広く普及していたライプハイゼン系の信用組合の方が国の農業・農村に適合していると判断していた。このため、法案提出に対応して急拠世の意見を問うために刊行されたのが本書であつた。しかし、実はこの書の原因執筆は横井や高橋ではなく、留学中に

ドイツの協同組合をつぶさに調査・研究してきた農務課長渡部朔と参事官織田一であり、彼らの草稿に手をいれて発行されたのが本書であるといわれている。わが国独自の農業・農村振興策がようやく確立されてくるこの時期において、諸外国からの直輸入ではなく、あくまでもわが国の風土に適した学理と実践性を重視した横井の社会活動の一例として、この書を見ることができよう。なお、第二帝国議会は政府と民党(板垣、大隈らの野党)が衝突して解散となり、この法案も廃案となつた。この法案が「産業組合法案」として形を整え再び提出されるのは、明治三十年二月の第十帝国議会であつたが、またもや審議未了となり、明治三十三年二月の第十四帝国議会においてようやく可決成立の運びとなつた。「農業党の先鋒者」「農業教育の情熱の人」「八面六臂の男」とも言われる「農学の祖」横井時敬の、若き日の活躍の一端をこの書にみることができる。

(農業・資源経済学専攻 八木宏典)

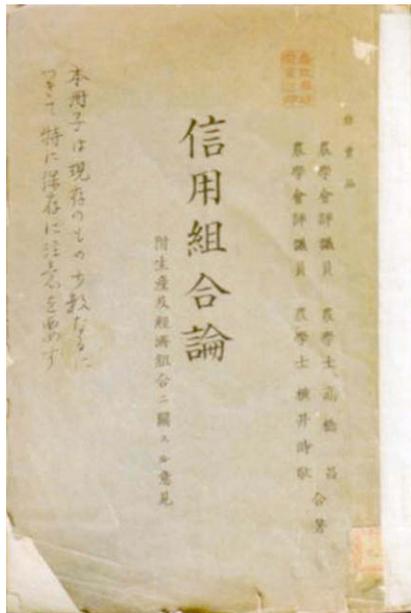


図7 『信用組合論』
高橋昌 横井時敬 1891

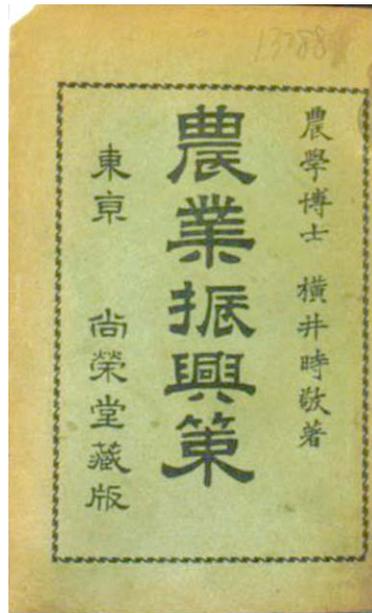


図6 『農業振興策』
横井時敬 1907

田中節三郎君未定稿

田中節三郎、旧姓後藤節三郎、は慶応元（1865）年越後国北蒲原郡にて生まれ、十五年十七歳で駒場農学校普通農学科を卒業、十八年同校農学本科卒業、続いて同校研究科に入り、一年間農芸化学分析を学んだ後十九年に同校の助教となった。その間、十八年には明治初期の農政・農学の第一人者であった田中芳男と養子縁組をした。農商務省に六年間勤務した後、二十五年には農科大学助教授となり、二十八年には作物学講座（現在の東京大学大学院農学生命科学研究科作物学研究室）の講座分担任となったが、これは実質的に作物学講座の開始であり、彼は本講座の始祖であった。田中節三郎は、明治三十六年に弱冠三十六歳の若さで惜しくも逝去したが、農商務省および農科大学勤務の研究、実地体験を集約して、『栽培名論』を著作し、作物学の体系化に大きな貢献をした。特にイネの起源、分類、伝播に関しては、過去の文献の精密な分析および新たな分類基準の提案においてその精細さについては内外に例がないものであった。また、農事改良に関しても堆厩肥の製法改良、良質牧草供与、二毛作による乾土効果、針葉樹枝条利用の暗渠排水あるいは種子消毒などその着眼点は今日にも通じ、非常に正確なものであった。工芸作物、熱帯作物にも通じ、さらにアメリカやヨーロッパ農業の視察を通して広い視野を持

ち、我が国の農業に対して的確な判断を下して改良に取り組んだ。明治三十四年の論文において既に我が国の食糧供給と作物生産の関係を欧米と比較し、自給を目指した生産改善について言及している。ここでは五つの対策、つまり、(1)米作の改善、(2)輸入食品に対する保護関税、(3)水産業の発達育成、(4)牧畜の堅実な奨励、(5)開拓地植民の要請が挙げられ、特に米作においては国家的治水から耕地整理に至るまで集団的実施を要することを指摘している。これらの食糧問題に対する指摘は平成の今日にも通用するものである。

『田中節三郎君未定稿』は田中節三郎氏が、農科大学において学生に講義を行った際にしたためた講義ノートと判断され、作物論一〜二十巻の全二十巻よりなっている。一巻が総論であり、他の各巻は各論となっており、稲(欠落)、大麦、小麦、雑穀から牧草、煙草、繊維、糖料などよりなっている。和紙に毛筆書きされたものであり、部分的に朱筆で訂正、追加された部分も認められる。これは、田中氏が逝去した後、横井時敬、古在由直らによって製本され、農科大学図書館に寄贈されて学生の教科書として利用されたものの一つである。横井ら八名は発起人となって、生等同志相諮り広く醸金を募り、農書を購入、同君縁故の農科大学に寄贈、田中文庫の名称を以て斯学を修る者の便益に供し、以て同君の意志を永遠

に伝え度と存候間何卒御讃同程熱望に不堪候」と追悼募金を行ったという記録がある。この寄贈された田中文庫は、その後作物学研究室に保管され、つい最近まで目目に触れることはなかった。が、近年、本研究室第三代教授戸苅義次博士、第五代教授玖村敦彦博士、第六代教授石井龍一博士の手により分類・整理された。(戸苅義次著『東大農学部作物講座始祖田中節三郎小伝』農業技術52(7)1997より抜粋)

(農学部附属農場 山岸順子)

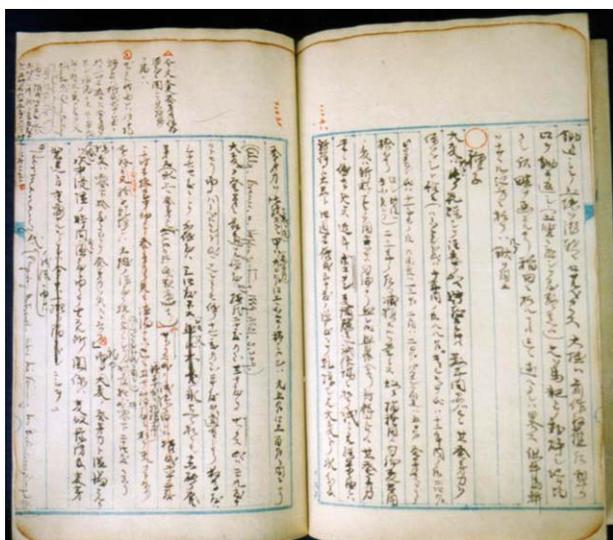


図8 『田中節三郎君未定稿』

本邦産くるまえば属 附図九枚 岸上鎌吉著 1900

著者は本学水産学第一講座教授であった岸上鎌吉博士である。本書はまた水産学科が設立される前の明治三十三(1900)年に農商務省水産調査報告第八卷第壹冊として刊行された。当時著者は農商務省水産局の技師であり、明治四十一(1908)年に水産学第一講座が農科大学に新設された際、初代教授として迎えられた。本書は当時の日本産クルマエビ属十三種の形態の記載にとどまらず、発生や成長などの生活史についても触れている。本書では新種の記載や分類学的な再検討といった試みはなされていないが、日本産のクルマエビ類を丁寧に記載した点で高く評価されている。特に、各種の精緻なカラーの図は、現在でもエビの専門書に引用されている。なお、著者はサバ科魚類の研究では世界的に有名であり、その集大成が大正十二年(1923)年刊行の農学部紀要第八卷第三号に掲載され、現在でもサバ科魚類研究者の必読書となっている。

(水圏生物学専攻谷内 透)



図9 『本邦産くるまえば属』附図1 クルマエビ

農務顛末

『農務顛末』は、明治十年代を中心とする約十五年間にわたって明治新政府が遂行した農業行政上の施策を、巨細もささず分類・編纂したものであり、明治初期農政を解明するに際して、まず纏くべき資料とみなされた。農学部所蔵本にもとづく活字本が一九五二年に公刊されたことよって、本資料へのアクセスは容易となった。同公刊本には古島敏雄氏(本学名誉教授)による詳細な「解題」が付されている。それを参考に、『農務顛末』の内容と資料的価値を紹介しておこう。

『農務顛末』が主に収録するのは、明治八年七月二日の内務省火災から本資料の編纂作業が行われた明治二十一年に至る時期の農政の動向を示す資料群である。全体は三十一部門からなるが、まず各種施策の対象となった作物・家畜別に、穀類・果樹・繊維植物・染料植物・油糧植物・薬用植物・雑用植物・糖業・茶業・烟草・種苗・蚕業・家畜・家禽・蜜蜂の十五部門が立てられ、ついで、虫害・獣医及獣病・銃獵・農具・肥料・製造・開墾の七部門で作物・家畜に共通する事項が扱われ、さらに、明治初年の試験研究機関の設立・活動の経緯が、内藤新宿試験場・三田育種場・三田農具製作所・下総種畜場・嶺岡牧場・播州葡萄園・神戸阿利襪園・小笠原島出張所の八部門で扱われている。最後の第三十一には、いずれの

部門にも分類し得ないものが集められている。以上三十一部門のうち、農学部所蔵資料には、染料植物・蜜蜂・銃獵・下総種畜場の四部門が欠けている。二十七部門八十九冊が現在所蔵されているわけである。

『農務顛末』が主として扱う明治十年代は、従来、欧米農法の模倣期として概括されてきた時期である。確かにこの時期の農政は、開港後に激増した欧米諸国からの輸入を防遏するとともに、有力な輸出農産物・農産加工品をいかに育てあげるかという点に、最大の関心を向けていた。イギリスからの綿製品輸入によって圧迫されていた国内綿業の建て直しのため、長繊維のアメリカ綿花を導入しようとしたのは前者の例であるし、国際商品としての紅茶への強い関心は、後者の一例である。また、ブラム・リンゴ・洋ナシなどの果樹やオリーブなどの油料作物の種苗が輸入され、国の試験場に移植されたり、全国各地の老農による栽培試験に附されたりした。欧米農法の模倣には、作物・家畜の導入にとどまらず、耕作様式を改良する企図も含まれていた。プラウ・ハローなど西洋農具も数多く輸入され、これまた試験場や各地老農による試験利用に供されていた。

しかし明治初期農政の基調を、欧米農法の模倣という点でのみ把握するのは正しくない。明治十年代以降本格化する近世農書の蒐集・編纂の企てや農事共進会・集談

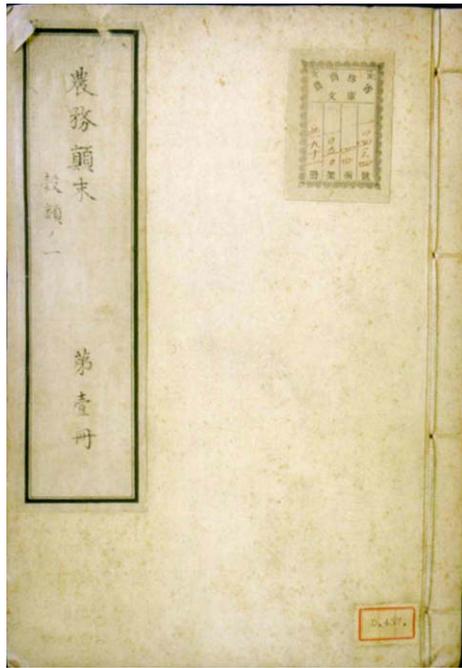


図 10 『農務顛末』

会の開催などは、在来農法への着目という、明治初期農政を貫く今ひとつの関心を映し出している。『農務顛末』は、欧米農法の模倣と在来農法への着目との間で揺れ動く明治十年代農政の推移を、主要地帯における農業生産に関する具体的記述を通して教えてくれる、貴重な資料群なのである。

(農業・資源経済学専攻 岩本純明)

小作慣行調査

戦前期のわが国農村を特徴づけた小作制度について、農商務省（のちに農林省）は数度にわたってその慣行を調査している。このうち調査結果が公表されているのは、明治十八年、大正元年、大正十年、昭和十一年の四回分であるが、農学部には、このうち大正十年（『小作慣行調査』）と昭和十一年（『小作事情調査』）の調査個票が所蔵されている。いずれも、農林省から農学部農業経済学教室に貸与され、その後農学部図書館で保管され現在に至っている資料である。

一、『大正十年小作慣行調査』

『大正十年調査』は、全国の町村をもれなく対象とし、また小作慣行を細部にわたって調査した点で、最も充実した調査と評価されている。調査項目は以下の十七項目からなる。すなわち、(1)小作契約の締結、(2)小作契約の期間、(3)小作料、(4)小作料の納入、(5)小作料の滞納、(6)耕地整理が小作慣行に及ぼす影響、(7)米穀検査と小作慣行との関係、(8)小作契約の登記および小作地に対する制限、(9)地主または小作の賠償、(10)小作地修繕改良およびその負担、(11)小作契約当事者の変更、(12)契約の解除および消滅、(13)土地管理人、支配人、世話人等、(14)その他小作に関する重要事項、(15)永小作、(16)刈分小作その他特殊の小

作、(17)小作に関する慣行の改善を要する諸点、理由、その方策、である。また、これら項目はさらに小項目・細項目へと細分・具体化され、極めて詳細な調査項目へと組み立てられていた。

現在農学部で保管している調査原票は、北海道・福島・神奈川・徳島・高知・沖縄の一道五県を除く地域の郡ならびに町村調査個票である。ただし、保存の程度は府県により差がある。調査原票が残されている町村数の、全国町村数に対する割合は52%にとどまっている（秋田・群馬・埼玉・千葉・新潟・山梨・静岡・愛知・滋賀・和歌山・鳥取・島根・愛媛・福岡の諸県は80%以上の高い残存率を示す）。一部作成された町村調査個票のうち一部が関東大震災で焼失してしまったことが、町村個票の残存率を低めたと考えられる。

二、『昭和十一年小作事情調査』

『小作事情調査』も、『大正十年調査』とほぼ同様の調査項目をもっているが、全町村が対象にされたわけではない。各郡から農業条件の異なる町村をおおむね三町村選び出すという方法がとられている。稲作地方・畑作地方・山地地方という区分が、調査町村選択の基準として採用されている。農学部が保存する個票は、秋田・山形・栃木・群馬・東京・福井・高知・長崎・沖縄の一府八県

を除く道府県の調査原表である。

以上に紹介した『小作慣行調査』の町村個票は、県あるいは全国レベルの集計値の背後に隠された小作慣行の地域的多様性を生き生きと伝えている。また、外国法の強い影響のもとに形成された近代法制度と、農村部における「生ける法」として長期にわたってその規範性を保持した慣行との関連を具体的に探っていく上でも、貴重な手がかりを与えてくれる資料群である。

なお、『大正十年小作慣行調査』については、近年、マイクロフィルム化され市販に供された。本資料に関する詳細については、同マイクロフィルム版に附された解説(岩本純明稿)をも参照されたい。

(農業・資源経済学専攻 岩本純明)

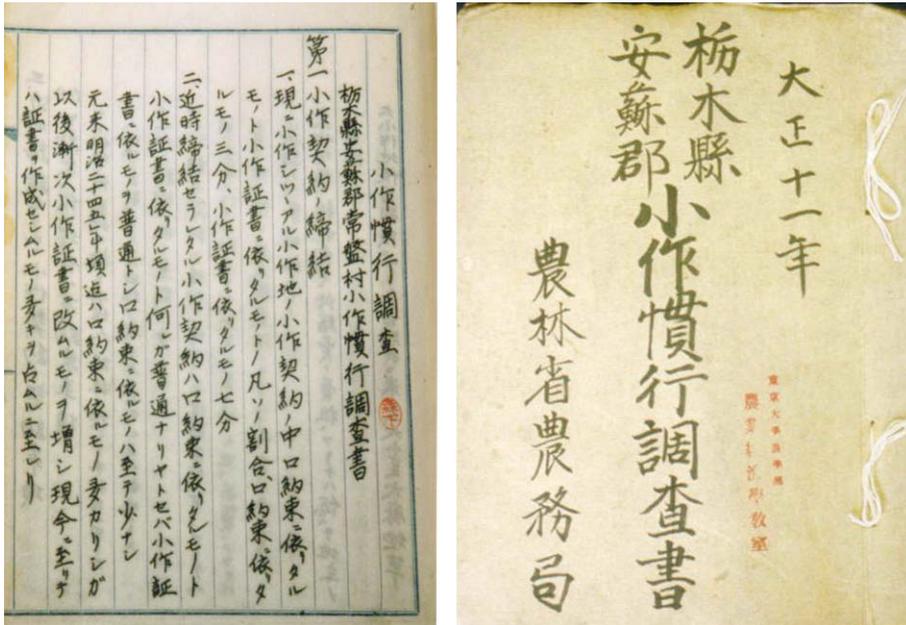


図 11 『小作慣行調査』大正 11 年 栃木県安蘇郡

Engelbert Kaempfer (エンゲルベルト・ケンペル)
1651-1716

Amoenitatum exoticarum politico-physico-medicarum.
Fasc. V., 1712 (廻国奇観)

ケンペルはドイツに生まれ、牧師の父のもとで旅行好きの青年に成長した。ロシアのケーニヒスブルク大学で医学、歴史学、博物学を、その後スウェーデンのウプサラ大学で博物学を学んだ。ウプサラ大学はストックホルムの北約60kmに位置し一四七七年に創設されて、パリ大学と並ぶ北欧最大の大学であり、生物分類学の方法を確立したリンネ (Carl von Linné, 1707-1778) が教鞭をとった大学でもある。ケンペルはオランダの東インド会社の医官となり、一六八八年からインド、セイロン、ジャバ、マレー半島、タイなど東洋各地をオランダ艦隊に同行して、一六九〇年十月に長崎出島に着いた。それから二年の間、医師としての勤務の傍ら、日本の動植物、歴史、風俗などあらゆる部門に関心を示した。一六九二年十月に喜望峰を経てオランダに戻った。その後、一六九四年に日本の動植物に関する論文をオランダのライデン大学に提出して、学位を受けた。

ケンペルは日本に滞在中に、二度にわたって江戸に参勤し、当時の將軍綱吉と会見している。この時代の日本の歴史や政治について『日本の歴史』(The History of Japan,

1727) を著した。この本は、英語版の他、オランダ語版、フランス語版、ドイツ語版などに翻訳されて広く出版された。

ケンペルの貢献は、何と言ってもアジア各地の滞在先での見聞をまとめた本書『廻国奇観』(Amoenitatum Exoticarum Politico-physico-medicarum, 1712) を著述したことである。その第五巻は、ほとんど日本の植物のみに費やされていて、三二四種の植物について記述されている。わが国の江戸時代を代表する優れた本草学者に貝原益軒 (1630-1714) がいて、『大和本草』(1708) を著している。ケンペルと益軒の記述を比較すると、益軒は興味の中心が植物自体の記述のみではなくその植物をどのようにして人間が利用するかという点にある一方、ケンペルは植物の記述が極めて詳細なものであり、本書に記載の植物の図は大変正確であった。リンネは、後にこれを基にして『植物の種』(Species Plantarum, 1753) に日本の植物を世界に紹介している。

現在、植物の命名法は、リンネの『植物の種』(1753) を基準としている。ケンペルの著作は一七二二年でリンネの『植物の種』以前のものであるが、ケンペルの業績は高く評価されている。ケンペル没後、多くの資料は大英博物館の所蔵するところとなり、現在一部は大英博物館から分かれたロンドン自然史博物館に保管されている。

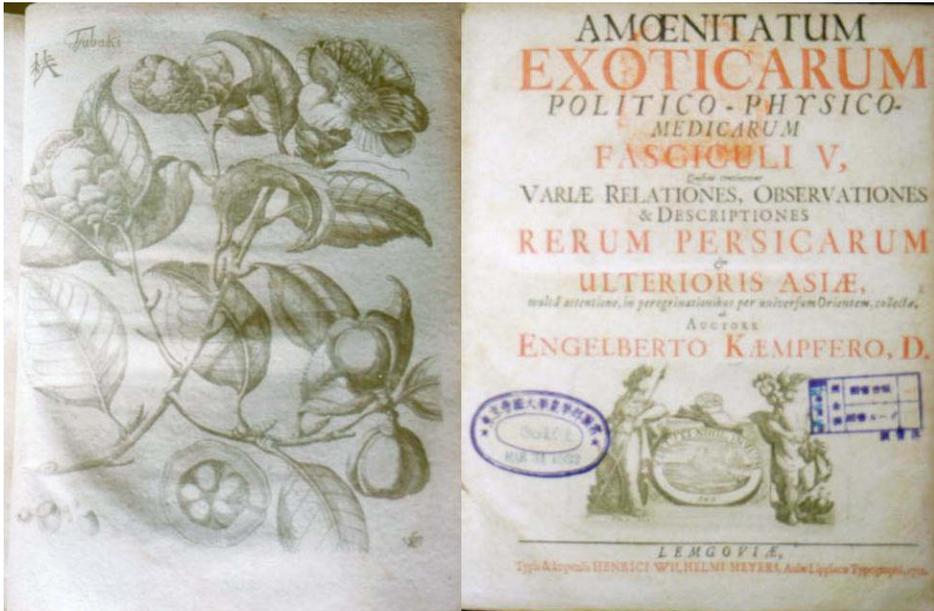


図 12 ケンペル『廻国奇観』標題紙、椿図

ケンペルの名前を記念して種小名として用いられている代表的な樹木の一つにカラマツ *Larix kaempferi* がある。

(森林科学専攻 鈴木和夫)

Carl olinn (カール・フォン・リンネ) 1707-1778

Systema naturae 2nd ed. rev. 2^a. 1766-1767

Genera plantarum 9th ed. 1767

Species plantarum 1753 (復刻版 1935)

リンネは、植物分類学の父といわれその名を多くの人々に広く知られている。スウェーデンに生まれ、ルンド大学で医学を学び、その後ウプサラ大学に移り、一七四一年医学部教授、翌年植物園長となった。ウプサラはストックホルムの北⁹⁶kmの亜寒帯針葉樹林気候であり、リンネの住まいの周りは極めて植生の貧弱な土地であった。しかし、リンネの家の中は植物のスケッチで埋まっており、植物の分類において初めて種という概念を用いて、世界で最初の生物の分類体系を提案した。リンネは自然物を整理して、一七三五年に動物・植物・鉱物の三界を扱った『自然の体系』(Systema Naturae 第一版)を出版し(第十版が動物の命名法の基準となる)、一七三七年に『植物の属』(Genera Plantarum)を、一七五三年に『植物の種』(Species Plantarum 第一版、植物の命名法の基準となる)を出版した。リンネは、植物を雄しべと雌しべの数や形に基づいて区分し、当時知られていた植物を七七〇〇種に分類した。また、この分類に用いた方法は、属と種小名の二つをフテン語で列記し、さらに、これに命名者の名前を記載する二名法(binomial nomenclature)で

ある。例えば、ツバキは *Camellia japonica* Linnaeus ʼ、*Camellia* が属名、ʼ *japonica* が種小名、Linnaeus (Linne のラテン語名) が命名者名である。この二名法は、その後の植物の命名法の出発点となり、国際植物命名規約の基準とされて現在に引き継がれている。このように、世界の植物についての知識を整理して体系化することで、植物の種に関する知識を多くの人々が共有することが可能になったのである。

わが国で普通にみられる樹木のイチヨウ (Ginkgo)、マツ (Pinus)、ネズミサン Juniperus、ネズミ Thuja、イチイ (Taxus)、ヤマモモ Myrica、クルミ Juglans、ヤマナラシ (Populus)、ヤナギ Salix などの属名はすべてリンネの命名によるもので、リンネの命名となる属の枚挙に暇がない。リンネはツインベルグ (Car Peter Thunberg, 1743-1828) など多くの人材を育て上げ、その功績を記念してスイカズラ科リンネソウ属に *Linnaea* が用いられて広く知られている。

(森林科学専攻 鈴木和夫)

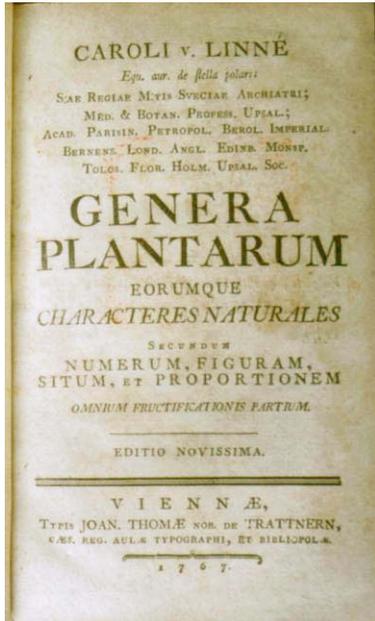


図 14 リンネ『植物の属』
9 版 1767 標題紙

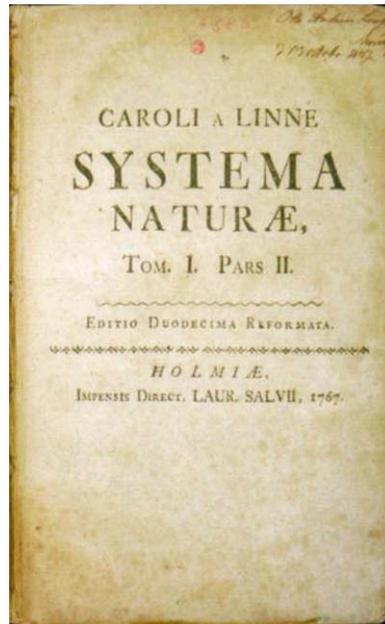


図 13 リンネ『自然の体系』
12 版改訂版 1767 標題紙

Carl Peter Thunberg (カール・ペーター・ツンベルグ) 1743-1828

Flora Japonica. 1784

ツンベルグはスウェーデンに生まれ、ウプサラ大学に学んだ。当時、ウプサラ大学ではリンネ (Carl von Linné) が教鞭をとっており、リンネの第一の高弟となった。その後、リンネの業績を継承する植物学者としてウプサラ大学の教授、そして学長を務めた。リンネと同じく医者であり生物学者であるツンベルグは、東インド会社の医官として一七七五年八月に喜望峰を経由して長崎出島に着いた。一年半の日本滞在後、一七七六年十二月にジャワを経由してオランダに戻った。

ツンベルグは日本に滞在中、長崎付近と江戸への参勤の際の東海道、主に箱根付近の植物採集しかできなかったものの、日本の植物について多くの論文を発表した。なかでも本書『日本植物誌 (フロラ・ヤポニカ)』(Flora Japonica, 1784) は日本の植物についての画期的な著作である。これまで日本の植物については、ケンペルの『廻国奇観』によって断片的にしか知られていなかったが、本書『日本植物誌』や『Kaempferus Illustratus I-II, Nova Genera Plantarum 1, 3』¹⁾、そしてツンベルグの資料を基にして記述された『Linnaeus filius: Species Plantarum Supplementum』²⁾ や『Martinus Houttuyn: Natuurlijke Historie』³⁾ に

日本の植物が多数紹介されている。『日本植物誌』では、約八二種の日本の植物が記載されて、新属二十六、新種四一八が発表された。このことはわが国の植物学上画期的な出来事であり、このツンベルグの功績を記念して種小名として用いられている代表的な樹木の一つにクロマツ *Pinus thunbergii* がある。

江戸時代の本草学者の書物には、わが国の植物がどのようにして名前がつけられたかという考察はないが、ツンベルグは日本人がサンショウ、クコ、クスノキなどどのように利用しているのかということについて考察を加えている。

現在、ツンベルグの標本はウプサラ大学に保管されている。また、ツンベルグが日本で採集した標本に基づいて描いた三〇〇点余りの日本植物の図は、その後ロシアの植物学者マキシモヴィッチ (Carl Johann Maximowicz, 1827-1891) によってセントペテルブルグにあるロシア科学アカデミー図書館に保存されている。

(森林科学専攻 鈴木和夫)



図 15 ツンベルク『Flora Japonica』1784 標題紙, Aukuba (アオキ) 図

Philip Franz von Siebold (フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト) 1796-1866
 Florataponical 835

シーボルトはドイツに生まれ、ヴュルツブルグ大学の医学部教授だった父と同じく医学と自然科学を学んだ。大学を卒業後、東インド会社に軍医として勤め、一八二三年に長崎出島の医官として渡日した。その後、日本人女性滝と暮らし、二人の間に稲が生まれた。シーボルトは、長崎市の郊外鳴滝に診療所や学塾を設けて、西洋医学や自然科学を教えた。一八二八年帰国にあたり、当時禁制の地図や書物が発見されていわゆるシーボルト事件を起こしたために約一年間軟禁されて、一八二九年に帰国した。シーボルトは日本の植物を愛し、また、純粋な植物学的な興味だけではなく、園芸の観点からも関心を抱いていた。とりわけ日本の植物をヨーロッパの庭園に導入することは彼の渡日目的の一つであり、園芸種苗をオランダに送った。そして、テッポウユリなどの日本の植物が初めてヨーロッパで栽培される契機となった。

シーボルトは経済的支援を受けたオランダ皇后 Paulownia の名前をキリの学名(属名)とし、また、妻であった滝の愛称「おたきさん」に因なみアシサイに *Hydrangea otakusa* という学名(種小名)をあてた。

帰国後、日本の植物について本書『フローラ・ヤポニカ

(Siebold et Zuccarini: Flora Japonica, 1835-1870)を著した。シーボルトはツンベルグの『フローラ・ヤポニカ』とは異なる著作にするべく共著者にミュウヘン大学の植物学者ツッカーニー教授(Joseph Gerhard Zuccarini)の協力を得た。本書『フローラ・ヤポニカ』は、最初の一図〜一〇図が出版されたのは一八三五年であったが、最後の一二八図〜一五〇図はシーボルト没後の一八七〇年に刊行された。このようにしてS. et Z. (Siebold et Zuccarini)命名による植物名は、わが国のアカマツ、コヨウマツ、モミ、ウラジロモミ、コウヤマキ、ネズミサシ、アスナロ、イチイ、カヤ、ヤマモモ、サワグルミと枚挙に暇がない。また、ツガ *Tsuga sieboldii* やヤマナラシ *Populus sieboldii* など多くの植物の学名(種小名)がシーボルトの名前を記念して付けられている。

日本から持ち帰ったシーボルトの標本は、オランダの王立ライデン植物標本館、ツッカーニーのミュウヘン大学、そしてマキシモヴィッチの労によってロシアのコマロフ植物研究所などに保管されている。

(森林科学専攻 鈴木和夫)



図 16 シーボルト『Flora Japonica』1835 標題紙, 52 図 Hydrangea Otaksa (アジサイ)

Klein, Jacob Theodor (1685-1759)

Historiae piscium naturalis promouendae... 5 pts. 1740-1749

ラテン語で書かれた魚類の分類に関する著書である。周知のように、動物分類学の命名規約では、一七五八年一月一日を出发点と見なし、クモ類を除く動物についてはLinnaeusの“Systema Naturae, 10th Edition”をこの日と定めている。したがって、それ以前に発行された出版物にある学名はすべて無効名(nomen nudum)となる。本書は一七四〇年の出版となっており、当然分類学的には重きをなさない。もちろん、California Academy of Sciencesが発行した世界の魚の分類に関するデータベースである“Catalogue of Fishes”(2995pp., 1996)には、本書は参考文献として引用されていない。ただし、著者のJ.T. Kleinの一七七五年の“Gesellschaft Schauplatz”は引用されているが、二名式命名法でないという点に Official Indexには認められていない。本書はこのような宿命をもっているため、これほどの大著が文献として登場することがほとんどないというのは、科学書の宿命であるうか。しかし、十八世紀半ばに発行された魚類の分類に関する稀覯本として書誌学的には価値があろう。また、精緻な魚体図はなかなかの見物である。

(水圏生物科学専攻谷内 透)

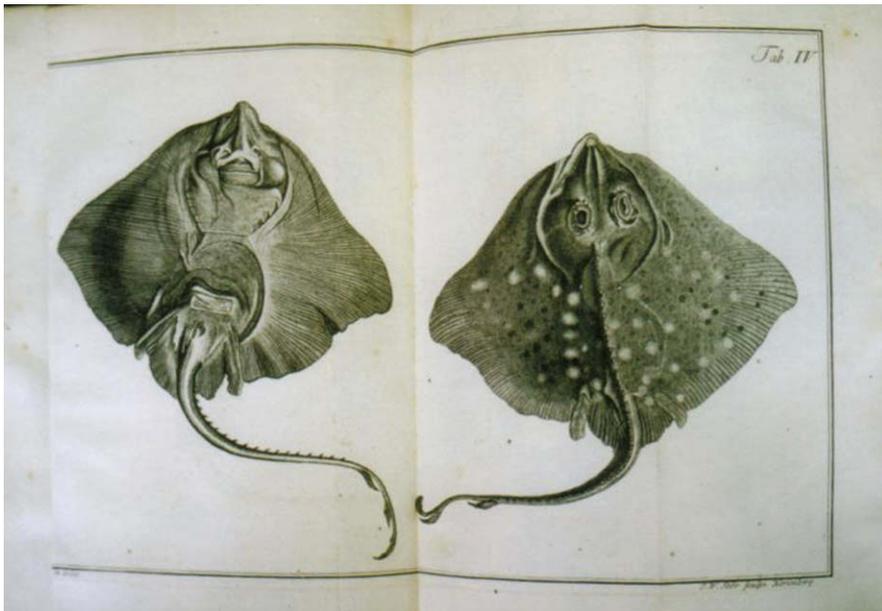


図17 Klein “Historiae piscium naturalis...”

Duhamel du Monceau, Henri Lois (1700-1782)

Traité général des pêches... 1769-1772

フランス語で書かれた漁業の概論と魚類の自然史に関する古典書(1769-1777)。⁸⁾18世紀半ば過ぎのフランスにおける漁業の実態が紹介されている。二つのパートに分かれ、第一部は漁具や漁業についての記述、第二部はヨーロッパでの最重要魚種であるタラを中心にした魚類の形態と生態、それに漁業に関する記述である。第一部は、さらに釣漁業と網漁業の二節に分かれ、それぞれの漁具の種類、作り方、仕立て方、設置場所による様々な漁法が紹介され、この当時に現在の漁業の原型ができあがっていたことが分かる。底引網も既にこの時代に原型ができあがっていたようだ。日本も漁業国といわれているが、この当時はむしろ日本よりは、フランス、イギリス、オランダなどのヨーロッパ諸国で様々な漁業が発展していたことが伺い知れる。精緻な図を配して理解しやすいように配慮がされている。それも単に漁具や操業形態を图示するだけではなく、人が絵に組み込まれているので、絵画的な雰囲気を出している。本書は産業革命前の原始的な漁業形態を止めながらも、やがて蒸気船の発明により漁業が飛躍的に発展する前過程を図解入りで説明している興味深い書である。

(水圏生物学専攻谷内 透)

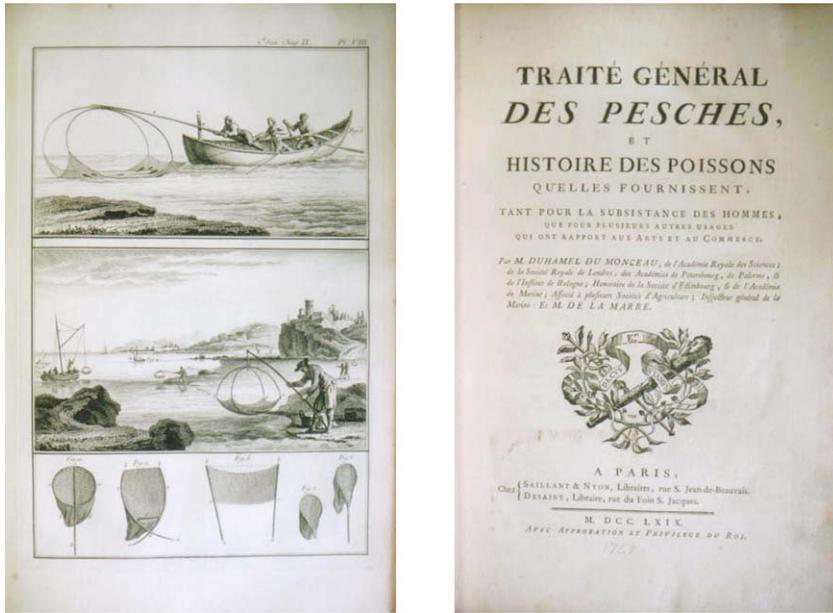


図 18 Duhamel “Traité général des pêches...” 1769 標題紙, 第 2 章 8 図

展示資料リスト

1. 江戸以前

- * 1. 『綿圃要務』2巻. 刊本2冊. 大蔵永常. 1833
- * 2. 『千蟲譜』写本7冊. 栗本昌臧. 1814序
- 3. 『増訂南海包譜』3巻図1巻. 山中信古編輯, 上街邦彦校正. 不詳
- * 4. 『国牛十図』写本1巻. 藤原貞幹. 1778(原本は延慶3年)
- * 5. 『日東魚譜』4巻. 神田玄泉纂. 1736序
- * 6. 『水中動物図』. 不詳

2. 明治から昭和戦前まで

[明治期卒業論文]

- 7. 『讃岐国糖業之実況及び其改良策』謝花昇. 1891
- 8. A Few Experiments on Barley and Rice Seed. 安藤廣太郎. 1895
- 9. 『英国之農業』有馬頼寧. 1910
- 10. 『小作論』小平権一. 1910
- 11. 『独逸農民史』那須皓. 1911

[教科書・講義ノート・論文等]

- *12. 『農業振興策』横井時敬. 1907
- *13. 『信用組合論 附生産及經濟組合二関スル意見』横井時敬, 高橋昌. 1891
- *14. 『田中節三郎君未定稿(作物論一, 四)』田中節三郎
- 15. Results of analysis performed at the Chemical Laboratory of Imperial College of Agriculture. (実験分析ノート). ケルネル(Oscar Kellner)
- 16. 『発酵化学講義(講義筆記)』古在由直
- 17. 『糠中の一有効成分に就いて』(東京化学会誌 第32巻 4-16頁)鈴木梅太郎. 1911
- *18. 『本邦産くるまえび属 附図九枚』(水産調査報告 8-1)岸上鎌吉. 1900
- 19. 『肥培論』フェスカ(Max Fesca) 渡部朔訳
- 20. 『栽桑実験録』船津伝次平. 1883
- 21. 『農業機械学(講義筆記)』稻垣乙丙
- 22. 『農業工学(山瀬端のノート〔講義筆記〕)』上野英三郎
- 23. 『日本蚕微粒子病研究書』佐々木忠次郎

[農商務省調査・集成資料]

- *24. 『農務顛末』農商務省. 1875-1888
- *25. 『小作慣行調査(大正10年, 昭和11年)』農林省農務局. 1921, 1935

〔外国農書の翻訳書〕

26. 『泰西農学』8冊. ゴーマス・シ・フレッチャル〔緒方儀一訳〕〔市川清流校〕1900

〔明治期創刊和雑誌初号〕

27. 『大日本蚕糸会報告』1巻. 1892

28. 『農科大学学術試験彙報』1巻. 1894

29. 『水産』1巻. 1900

3. 戦後

〔新制大学博士論文〕

30. 『生理遺伝学的にみたる家蚕の蛍光物質の代謝過程 特に家蚕幼虫のマルピギー管に於けるリボフラビンの蓄積について』石原廉. 1958

31. 『イスランヂヤ黄変米菌 *Penicillium islandicum* Sopp の生産する毒性物質”islanditoxin”の化学構造に関する研究』丸茂晋吾. 1955

32. 『土地改良の経済効果論』清水良平. 1958

33. 『農業における用水生産力の計測的研究』森島賢. 1963

4. 洋書

*34. *Amoenitatum exoticarum politico-physico-medicarum*. Fasc.V. (廻国奇観). ケンペル (Engelbert Kaempfer) 1712

*35. *Systema naturae*. 12th ed., rev. V.1 pt.2 リンネ (Carl von Linné) 1767

*36. *Genera plantarum*. 9th ed. リンネ (Carl von Linné) 1767

*37. *Species plantarum*. 復刻版. リンネ (Carl von Linné) 1753 (復刻版 1935)

*38. *Flora Japonica*. ツンベルク (Carl Peter Thunberg) 1784

*39. *Flora Japonica*. シーボルト (Phillip Franz von Siebold) 1835

40. *Flora Japonica*. シーボルト (Phillip Franz von Siebold) 1835

*41. *Historiae piscium naturalis promovendae...* 4pts.in 1. クライン (Jacob Theodor Klein) 1740-1749

*42. *Traité général des pêches*. 3pts.in 1. デュアメル (Henri Louis Duhamel du Monceau) 1769-72

43. *Les six livres de la Republique de I. Bodin*. (Jean Bodin) 1594

44. *England's improvement by sea and land*. (Andrew Yarranton) 1677

*印は解題あり

展示会協力

解題執筆

(氏名の五十音順)

生産・環境生物学専攻 助手 阿部 淳

獣医学専攻 助教授 今川 和彦

農業・資源経済学専攻 教授 岩本 純明

森林科学専攻 教授 鈴木 和夫

生産・環境生物学専攻 教授 田付 貞洋

水圏生物学専攻 教授 谷内 透

農業・資源経済学専攻 教授 八木 宏典

農学部附属農場 助教授 山岸 順子

その他

撮影指導

岩田 勝

東京大学農学部 125 周年記念農学部図書館展示企画
農学部図書館所蔵資料から見る「農学教育の流れ」
展示会パンフレット

平成 12 年 3 月 27 日

責任編集・発行 東京大学農学部図書館

〒 113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

電話 03-5841-5430 (ダイヤルイン)

Fax 03-5841-8176

E-mail library@lib.a.u-tokyo.ac.jp